

令和3年度教育未来委員会行政視察報告書

教育未来委員長 川合 隆史

【視察日程】 令和3年11月10日（水）

【出席者】 委員長 川合 隆史
副委員長 中村 公江
委員 伊藤 隆広、渡辺 忍、安喰 初美、山田 京子、
村尾 伊佐夫、岩井 雅夫、麻生 紀雄、
宇留間 又衛門
随員 西森 照泰、丸山 貴裕、茶谷 有美

【視察地及び調査事項】

1 扇田小学校


(1) GIGAスクール構想に向けたICT研究協力校の取組み状況について

2 ライトポート中央

(1) ライトポートにおける児童生徒への支援に係る活動状況について

【視察報告】

1 扇田小学校

調査目的	ICT研究協力校の授業におけるギガタブの活用状況を視察し、GIGAスクール構想の実現に向けた教育環境の進捗状況や課題を調査し、今後の施策展開に生かす。
視察概要	<p>1 調査項目</p> <p>GIGAスクール構想に向けたICT研究協力校の取組み状況について</p> <p>2 説明者</p> <ul style="list-style-type: none">・校長・教頭・教務主任 ほか <p>3 現地視察の様子</p> <p>① 担任（会議室）と児童生徒（学校内諸室）によるオンライン授業</p>  <p>児童生徒が在宅にいる状況を想定して、学校内の多目的室、視聴覚室等の諸室に生徒が分散し、担任と児童生徒がオンラインでつながり授業を行っている様子（4年生・算数）</p>

② ICT支援員による授業のサポート状況



ギガタブの活用に不慣れな児童生徒にICT支援員がサポートをしている様子（1年生・道徳）

③専科指導講師による音楽の授業



担任と専科指導講師の指導の下、授業支援ツール、オクリンクを使用した音符の並び替えを行っている様子（2年生・音楽）

④特別支援学級におけるICTの活用



担任の指導に従い、カメラで撮影した自分の発表の様子を確認し、振り返りをしている様子（特別支援学級・国語）

⑤ジャムボード機能を用いた児童生徒間の協同作業



授業で学んだ内容について発表ノートにまとめ、リアルタイムで共同作業できるデジタルホワイトボード機能のジャムボードを使用し、生徒間で気付いた内容を共有している様子（6年生・社会）

4 主な質疑・意見（□：質疑・意見 ■：答弁）

□ 子供たちは、授業で使うとき以外は、ギガタブを自由に使えるのか。それとも持たせていい時間を決めているのか。

■ 学校によって色々なルールを定めているため、扇田小学校の場合を紹介する。

休み時間の使用については、導入当初は、触る機会を増やそうということで使用していたが、天気が良く外で遊べる機会が減ってしまったという子供たちの声も多かったので、子供たちと担任で話し合っ
て、天気の良い日は外で遊ぶようにして、ギガタブの使用は控えることに子供たちと一緒にルールを決めたところである。

それ以外については、委員会の仕事をギガタブでやりたいので、休み時間に使いたいといった仕事に関することや、学習に関する
ことであれば使用を認めている状況である。

□ 授業におけるギガタブの使用頻度はどの程度か。先ほど、子育て中の先生方が多いので帰宅が早いと聞いたが、自宅でも仕事をしているのか。負担は軽減されているのか状況を伺いたい。

■ ギガタブの活用に関しては、主に子供たちの授業に生かすように使用している。日常の仕事として、例えば、打合せの用紙を紙で印刷していたところを、ギガタブを用いて職員同士で打合せを行うなど、負担軽減に少しずつつながっている。

一番効果が出ているのは、例えば、授業のワークシートを一つ作ったら、隣の先生と共有して使えるだとか、授業づくりでの負担
というか、効果的な活用に一番活かされていると思う。

ギガタブの使用頻度は、クラス、学年に応じて多少の差がある。

分かりやすいのは、1、2年生は少しずつ慣れてきているが、使う頻度はまだそこまで多くはない。

道徳や生活科などの授業での使用が中心となっている。逆に高学年は、先ほどご覧いただいたように国語算数理科社会という主要教科も使える場面が増え、体育や家庭科音楽などでも、少しずつ使える場面が増えてるので、やはり高学年の方が使える頻度が多いかと思う。



目安だが、1年生だと、1日、1～2時間、5、6年生だと1日、3～5時間程度使用している状況である。

□ ギガタブは教科や場面によって、利用方法に適不適があると感じた。また、ギガタブの使用に不慣れな児童生徒がいるように見受けら

	<p>れたが、そうなる個人差が大分生じる可能性があると思うがどうか。</p> <p>■ 個人差についてはご指摘の通り、年度当初は大きかった。3年生から6年生までは、すぐに身についたり、もともと堪能だったりする子供たちが多くいたので、担任が個別に支援に入るのは当然だが、子供たち同士で分からないところを教え合い、操作方法を共有して、全体で高めていったところが多い。</p> <p>特に、差が大きかったのは入力の仕方であった。ブラインドタッチができる子供やキーボード入力ができる子もいれば、それができない子は全て手書き、または、マイクを入れて、音声入力というように、文字を入れる場合の能力にはまだかなり差がある。</p> <p>ただし、必ずキーボード入力をしなくてはならないとしてしまうと、1、2年生の子供たちがギガタブに触れる機会が極端に減ってしまうので、入力の方法はいずれも認めている。そのうえで4年生ではキーボード入力はこれくらいまで、5、6年生ではこれくらいというような基準を設けることを考えている。</p> <p>□ 今後どのように評価をしていくかっていうのは課題になってくと思うが、こういった考えを持っているのか。</p> <p>■ ギガタブになったことによってより評価ができるようになったという実感をしている。</p> <p>例えば、先ほどご覧いただいた跳び箱の授業であれば、自分のギガタブの中に、今日の取組の一番よかったところを撮影した。</p> <p>担任はこの30人分の動画を後から見て、この技がこういうふうになくなっているんだというように確認できる。</p> <p>また社会科ですとか、理科の発表なども先生に提出することができる。提出された30人分のもので、後で添削をして生徒へ返却したり、評価に使うことができるので、ノート等とも併用してギガタブも一つの評価の材料にしている。</p>
<p>委員の所感</p>	<p>□ 全ての学年で授業の活用を見させていただき、非常に参考になった。ギガタブを使用してできる授業に関しては、まだまだ可能性が大きいと感じた。</p> <p>□ 全学年と特別支援のクラスで見学させてもらい、成長に応じた使用を行っており、端末活用による効果の可能性を感じることができた。算数の習熟度での分かる子、分からない子への支援などはどうなっ</p>

	<p>ているのかと感じた。</p> <p><input type="checkbox"/> 短期間の使用にもかかわらず、子供たちがギガタブに慣れ、高学年の子供たちは大分使いこなしているように思われた。それぞれの科目でどのような使い方ができるのかを見せていただき、新しい学習ツールとしての可能性を感じた。</p> <p><input type="checkbox"/> 休校を想定してのオンライン授業は、家庭で子供が一人で授業を受ける場合、分からないときにどのように対応していくのか課題も感じた。</p> <p><input type="checkbox"/> タブレットならではの教育効果について、たくさんの事例、メニューがあることが実感できた。</p> <p><input type="checkbox"/> 高学年は1日3、4時間タブレットを使うということだが、それでも、多いのではないかと思った。近くを見て視力が落ちたり、姿勢に悪影響を及ぼすことがないよう留意するとともに、電磁波の影響を少なくする対策を継続的に進めてほしい。</p> <p><input type="checkbox"/> 今は、試行錯誤中だと思うが、今あるメニューをすべて使うということではなく、タブレットだからこそ、その効果が大きい場面にのみ限定して使うようにしていただきたい。</p> <p><input type="checkbox"/> 各教科において有効活用されている様子が分かった。このような取り組みが全市への展開を期待している。</p> <p><input type="checkbox"/> 授業を参観して、特にギガタブをうまく利用しているのは体育のとび箱の授業で、自分の演技をすぐに見ることができ、良かった点、悪かった点を修正していけるところはとても効果があるように感じた。</p>
--	--

2 ライトポート中央

調査目的	ライトポートにおける生徒の活動状況を視察し、本事業の役割や成果を検証するとともに、課題や今後の事業展開について調査を行う。
視察概要	<p>1 調査項目 ライトポートにおける児童生徒への支援に係る活動状況について</p> <p>2 説明者</p> <ul style="list-style-type: none">・ チーフ指導員・ 指導員 <p>3 現地視察の様子</p> <p>①教員の指導の下、学習を進めている児童生徒の様子</p>  <p>②チーフ指導員から、ライトポート中央の現状や課題の説明を受ける</p> 

4 主な質疑・意見（□：質疑・意見 ■：答弁）

□ ここに入る希望の子供はたくさんいるのか。競争率が激しくてなかなか入れないといった状況はあるのか。

■ あまり多過ぎると、学校の教室と同じ環境になってしまう。学校の教室のように人数が多いのが嫌だという子たちがここに来て、少人数でやるというところに魅力があり、子供たちが集まるのだと思っている。

ただ、ここは、来るものは拒まずでやっている。定員というのはないが、以前、25名程度いて、こちらも人手が足りなくなってしまうことに加えて、子供たちも騒がしくなって来れなくなる子がいたことがあった。

ここはまだ正式通級と試行通級で14名だが、市内に6か所あるライトポート合わせて今の時点で151名で、1ライトポート当たり20人という状況をはるかに超えるような状況が生まれてきて、受入れを拡大できるような施策の必要性について取組を進めていくところである。

□ ここのライトポートはたまたま女子しかいないが、ここは学校の中にあるにもかかわらず、給食が出ないので弁当が持参であったり、公共交通機関を利用するなどして通わなければいけないということで、家庭に負担がかかっていると思う。この点に関して条件整備が求められていると考えるが。

■ 実際、母子家庭・父子家庭が多い。また、困っているということもある。

ただ、毎日必ず通うわけではなく、急に休むこともある。そうすると、給食を止めないといけないので、給食制度の導入はなかなか難しいと考える。

交通費はかかるが、要保護・準要保護児童に関しては申請を行えば全額補助されることになる。

□ 教室の数は一つだが、小学生も同じ部屋で行うのか、それとも別の場所があるのか。

■ 小学生も何人か見学に来るが、中学生がたくさんいて、先生も蘇我中学校から来ていただいているので、授業も中学生向けである。スポーツも体格差があつて、一緒になかなかできないので、小学生が遠慮してしまうところがある。

例えば、この学校に小学生のためのライトポートを作ることができ

れば、ノウハウは今のライトポート中央であったり隣のライトポートから受け継がれるため、同じように運営していけば、チーフの私が小・中学校を見て、指導員を5人ずつ配置することで両施設を運営できる。今、小学校の不登校児童生徒が非常に多いので、この辺の小学生も救われると思う。

教育センターで行っている事業で、なかなか家庭から出てこれないお子さんを家庭訪問相談によって支援しているものがあり、これの中学校と小学校の比率が、大体4：3ぐらいである。

ところが、ライトポートは、市内全体で151名いる中で、小学生は、一度見学に来て、1回だけ通級した子を入れても14名しかいない。要するに、ライトポートだけ、小学校の比率が異常に低くなっている状況にある。見学をして興味があるが、ここは中学校だなと感じてしまい、通級をやめてしまうというのが現状にあるので、小学校のライトポート事業の必要性を感じているところである。

□ 現在ライトポートに通級している生徒というのは、どちらかというと、非行を働くお子さんでなく、心の問題を抱えている子が多いように感じて、昔と今は大分変わってきた印象があるが、現状を教えてください。

また、このライトポートで通級が慣れてくると、本来の学区の中学校に戻すように促しているのか。

■ 10年くらい前は非行傾向の子供もいて、どちらかというと、積極的な生徒が、他の積極的な生徒と衝突して学校へ行けなくなり、ここへ来ていたので、以前はすごくエネルギッシュな子たちがいた。

徐々に、大人しくて繊細な子たちが行けない方に段々増えていると感じている。学校現場がどうしてこのように変わってきたのかは分からないが、実際見ていると、傾向が10年前と大きく変わった。

今年度、ライトポートの名称を、教育支援センターとしたように、もちろん学校に帰ることは一つの目的ではあるが、それが全てではない。ここで卒業してサポート校につながることも多くの報告がある。

卒業式も涙涙で、我々としては一生に一度しかないのだから、学校で卒業証書をもらいに行きなさいと言うのだが、なかなかもらいに行けない。

そのため校長室で受け取ったり家庭訪問により受け取ったりする子たちもいるのだが、ライトポートでは、生徒自身がここを居場所と考えていて、みんな涙を流しながら受け取って行く。その姿は本当に素

晴らしいな、成長したなと感じる瞬間である。

- 卒業証書というのは、その学区の中学校の卒業証書か。
- ここには籍はなく、籍は学区の学校にあるのでそれぞれの学校の卒業証書である。

- 在籍児童は学習能力の高い子が多い傾向にあるのか。
- 小学校から不登校になっている子は、小学校の勉強がまず分からない傾向にある。どちらかという、ライトポート中央にいる子の学力は高くないはと思う。美浜区の打瀬地区の子たちで、私立受験に失敗して、という子たちはある程度高い子がいるかもしれないが、比較的学力の低い子が多いように感じる。

- 中学生が多いということで、このライトポートから進路に進んでいくのはどういう子たちが多いのか。
- 県立はほぼ特定の高校が多い。内申とかは関係なく、その時の点数で合否が決まる。高校もそういう体制が出来ているので、ほとんどその高校である。他には通信制とか私立とかの学校などとなっている。我々は進路指導を行わない。あくまでも主体は学校であるので、学校に進路指導していただかないと、私たちは調査書も書けない。サポートしていく形で相談されたら、パンフレットを渡すくらいは行っているがその他については学校が行っている。

- 現状、なかなか進路指導はできないから、どういう形で進めているかということも実態としては把握しきれない状況なのか。
- 面接の練習を我々で行ったり、作文を見たりとか、そういうところで関わっている。

なお、進路先については把握している。昨年度はライトポート全体で57名の中学3年生が卒業し、うち54名が進学している。昨年度はコロナ禍であったので、3名が在家庭という形になっている。ほとんどの年は通信制とかサポート校を含めると100%が進学している。県立高校へは昨年度は4名だった。率としては低い、本当であれば全員家庭だったかもしれない子供が進学できているということでは、ライトポートはかなり大きな役割を果たしていると言えるのではと実感している。

委員の所感	<p><input type="checkbox"/> 無くてはならないものであると実感できた。</p> <p><input type="checkbox"/> 職員の方の処遇改善も必要と感じた。</p> <p><input type="checkbox"/> 非常勤職員だけの運用ではなく、運用面でのライトポートを確立することが市内の不登校児童・生徒の支援につながるように思えた。結局は意識のある教員OBなどに支えられており、ライトポートが真の意味での子供たちの選択肢となることを研究することが必要であると思った。進路や将来の仕事につながることを目指していただきたいと思う。</p> <p><input type="checkbox"/> 一人でじっくり課題に取り組む子、友達や職員と会話しながら進めている子と、自分のペースで学習できる環境があるのはライトポートの良いところではないかと感じた。</p> <p><input type="checkbox"/> 小学生の不登校児童が増えているということなので、小学生向けのライトポートの整備を進めてもらいたい。</p> <p><input type="checkbox"/> 小学生は見学に来て、正式通級しないと聞いた。小学生向けの教室も必要であるし、ライトポートが区に1か所というのは足りないと思う。箇所数を増やすことも考えていただきたいし、1か所の定員を増やせる場所の確保や、人員増を求めたい。</p> <p><input type="checkbox"/> 男子がいなかったことが気になった。 その要因を分析して、男子も入りやすいライトポートにしていきたい。</p>
-------	---